

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03534

研究課題名（和文）現代日本における死者儀礼のゆくえ - 生者と死者の共同性の構築をめざして

研究課題名（英文）Rituals for the Deceased in Contemporary Japan: Aiming to Construct Communities Between the Living and Deceased

研究代表者

山田 慎也 (YAMADA, Shinya)

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授

研究者番号：90311133

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,600,000 円

研究成果の概要（和文）：高齢者住宅や生活協同組合の共同墓、病院による助葬事業等、従来の地縁、血縁ではない新たな関係性は、死後の関係ではなく生前からの共同性が重要にあることが明らかになった。またデジタル遺影やオンラインメモリアルなど、新たな形態の死者表象も誕生していることも指摘した。一方、伝統的と捉えられていた従来の墓や位牌、葬儀も、常に社会構造や生活状況に応じて変化しており、その過程の詳細な歴史的検討を重ねることではじめた現在の実態を正確に把握することができることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、直葬や散骨、樹木葬などの新たな儀礼が誕生し、孤独死の増加など、死者儀礼は大きく変容し社会問題化している。これは社会の個人化の進展が背景にある一方で、従来には見られない新たな共同性を持つ事象が誕生している。本研究では、従来の分析枠組みでは捉えきれない事象に対し、生者と死者の共同性を析出し、個人化の進んだ社会における死の受容のあり方を検討するものである。これにより、従来の葬送墓制研究の新たな段階を構築するだけでなく、大きな社会問題ともなっている現代人の死への対処法への解決にも貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：In this project report, we make clear that community not after but before death is important in the communal graves of senior citizen housing complexes and cooperatives, hospital-lead funeral assistance endeavors, and other new forms of relationships that are not based on conventional local or blood ties. Also, we discuss the emergence of new forms of representing the dead such as digital portraits and online memorials. Additionally, we argue that the graves, memorial tablets, and funerals that have been understood as “traditional” are always changing in accordance with social structures and living conditions and that we can only precisely grasp the present-day situation by engaging in detailed historical examinations of such processes of change.

研究分野：民俗学・文化人類学

キーワード：葬儀 墓 無縁 デジタル 死 個人化 家 産業

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、葬儀の簡略化や小規模化が進展し、火葬のみで葬儀を行わない直葬も増加している。また従来の墓に代わって、散骨や樹木葬といった新たな葬法なども誕生し、葬送墓制は急速に変容している。これらの変容の要因については、基本的にいずれも近代化による家制度の解体と地域社会、家族構造の変化による個人化の影響として捉えられてきた。

墓制に関して、法社会学(森謙二 2014)や宗教社会学(井上治代 2003)、造園学(楨村久子、2013)等の立場から、個人化により墓の継承が困難になり、新たな葬法が生まれていることを指摘している。さらに葬儀でも、意匠論(井上章一、1983)や生活設計論(小谷みどり、2000)、民俗学(山田慎也、2007)等が、個人化の進展によって告別式中心の葬送儀礼となり、それを地域共同体に代わって葬儀産業が支えている状況を分析している。

このような死者儀礼研究は、個々の専門分野で研究が蓄積される中、学際的に総括して捉える必要性を宗教学の鈴木岩弓は指摘し、科研費「わが国葬送墓制の現代的变化に関する実証的研究 - <個>と<群>の相克」(21320016)、「現代日本の葬送墓制をめぐる<個>と<群>の相克 - 東日本大震災を見据えて」(24320016)において、<群>という家や地域共同体、さらに葬儀産業などさまざまなレベルの集団と、それに対峙する<個>との関係を照射した。

申請者はこれまで葬儀を中心に、現代の死生観の変容に関心を持ち研究を進めてきた。特に葬儀の中心儀礼が葬列から告別式に変わり、それを支える葬儀産業が発達していることを、社会の個人化と専門家集団といった「ヒト」の関係性の変化による儀礼創造に焦点を当て検討している。その際、儀礼に使用される死者表象の重要性に着目した。死者儀礼は、死によって肉体が消滅した故人を対象としているため、位牌や遺影、祭壇、墓など、具体的事物である「モノ」を通して死者の人格を表象する特徴がある。そこで申請者は、祭壇や遺影など、死者表象の形成過程を通して、死生観が現在どのように変わっているか、なかでも産業化の中で人々が死に対峙する営みを明らかにしてきた。以上のように、死者儀礼における「ヒト」と「モノ」の関係の重要性を強く認識している。

申請者は上記鈴木岩弓代表の科研にも参加し、<群>となるイエ、ムラ、葬儀産業などの集団と<個>との関係の分析を進めてきた。しかし現代、<群>と<群>といった二項対立からはこぼれ落ちる、追悼儀礼への多様な関係者の参加や「墓友」にみられる紐帯など、第三項ともいえる新たな社会関係が多様な場で展開しており、これらを学術的に総体として捉えることで、現在の葬送墓制の変容の特質を考察し、死生観の変容を明らかにすることが可能と考える。

従来のイエやムラ、寺檀関係など、<群>として見てきたものは、いずれもドミナントな社会構造であり、それが解体し個人化が進んでいった。しかし単身化が進み孤独死など、個人化の弊害といえる事態が発生し近年社会問題化している。しかし行政の対応は限定的であり、民間NPO 法人などさまざまな人々が、単身者のケアや孤独死の対応を行っていることが判明しつつあり、個人をつなぐ緩やかな共同性の総体的把握が必要となっている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、死者儀礼を担う共同体や社会関係などの「ヒト」と、死者の表象となる墓や遺影など「モノ」との関係を通して、現在生成されている新たな共同性を捉えることで、人びとの死生観の変遷を考察することである。現在、火葬のみ行う「直葬」や散骨、樹木葬といった新たな儀礼が誕生し、また無縁社会や地域崩壊による孤独死の増加など、死者儀礼は大きく変容し社会問題化している。これは社会の個人化の進展が背景にあるが、一方で、孤独死防止のためのNPO 支援や東日本大震災犠牲者の多様な追悼儀礼の執行、「墓友」といわれる合葬式共同墓での会員交流など、従来には見られない新たな共同性を持つ事象が誕生している。本研究では、従来の分析枠組みでは捉えきれない事象に対し、生者と死者の共同性を析出し、個人化の進んだ社会における死の受容のあり方を検討するものである。

この現代的な課題を分析するには、過去との関係性を理解する必要があるため、現代の1990年以降の個人化の時代と、それ以前の高度経済成長による核家族化の時代、近代的イエ・ムラ成立の時代の3期に分け、それぞれ死者儀礼の特質を捉えるとともに、イエやムラ、家族といった、の時代の中心的な構成原理となる、ドミナントな社会構造からはずれた個人に対する共同性に着目し、現代の共同性作成の試みと比較検討することで、新たな共同性の特質とその可能性を考察する。これにより、従来の葬送墓制研究の新たな段階を構築するだけでなく、大きな社会問題ともなっている現代人の死への対処法への解決にも貢献するものである。

### 3. 研究の方法

(1)まず1990年代以降の個人化の時代における変容した死者儀礼の実態を把握する。その際、儀礼を担う「ヒト」と、墓や位牌、遺影など「モノ」との関係に着目する。現代、個人化が進み死者儀礼全般に深く立ち入った調査が困難になり、写真などのビジュアル化された資料収集は難しい。そこで1991年刊行の葬儀業界誌『SOGI』の585件の葬儀記録と95000枚の葬儀写真を資料化し、現代変容する死者儀礼の特質を把握する。

(2)その上で新たな共同性の事例調査を行う。共同性生成の場は大きく死の前後に分けられる。生前の事例として、孤独死予防のNPO 活動、単身者の葬儀執行のための生前契約制度等であり、死後の形成として、災害や事故の追悼儀礼の多様な参列者、合葬式共同墓の「墓友」といわれる紐帯など、個々人を包み込む新たな紐帯の実態調査を行い、その紐帯のあり方や組織・

ネットワークの生成過程、持続性などを、「ヒト」と「モノ」との関係から把握しその実態を明らかにする。

(3) さらに過去の 高度経済成長による核家族化の時代や 近代的イエ・ムラ成立の時代においても、ドミナントな社会構造を改めて検討することで、現在の状況に至るその背景を検討するとともに。そこからこぼれ落ちた個人を結びつける紐帯を明らかにする。高度経済成長期に普及した公園墓地とその無縁納骨堂を通して、核家族を基盤とした家族墓の実態を捉えるとともに、無縁死者の納骨堂や儀礼による個人の紐帯を照射する。また近世・近代期にも、寺院や墓地等では無縁死者への供養が頻繁に行われた。こうした近世・近代の死者儀礼を、墓地や納骨堂など「モノ」とそれを取り巻く「ヒト」について、考古学、地理学など学際的な視点から、その盛衰の要因もふくめて分析し、個人的な死者儀礼の特質を明らかにする。このように現代( )とそれを作り出した過去( )における共同性の試みを比較検討することで、現代の特徴を照射するだけでなく、時代を超えた社会的紐帯の特質を明らかにし、生者と死者の共同性のあり方を解明する。

#### 4. 研究成果

(1) 従来の地縁、血縁を基盤とした社会関係によって死者祭祀が執行されてきたが、家族構造の変化や少子高齢化の進展によって、単身化や老夫婦世帯が増加している。単身者や高齢世帯では年齢が進むと高齢者施設に移行するケースが増えている。そこで地縁や血縁に依存せず、生前の多様なつながりをもとに、死後の共同性を模索する動向が形成されていることがわかった。例えば兵庫県高齢者生活協同組合では、地域の会員同士で共同墓を設置し、生活のさまざまなイベントを行っている。また、「ゆいまーる那須」という高齢者住宅では住民の希望で共同墓を所有するなどの動きがある。当初、地縁や血縁を超えて、共同墓に入ることを目的とした人々が交流を深める「墓友」についても検討を行った。しかし、実際にはその関係性は共同性を構築する程には至っておらず、生活の場での生前の共同性が、死者の祭祀に連動していくことが分析から明らかになり、理解の転換の必要性を指摘した。

(2) 一方で、現在の合葬式共同墓や散骨、樹木葬などの新たな葬法や墓じまいと称した改葬等によって死者の尊厳性が脅かされている現状を提示した。その背景には現行法の墓地、埋葬等に関する法律が、法的規制ではなく戦前期の祖先祭祀思想と土葬によって遺体遺骨の保存と継承が担保され、死者の尊厳性が確保されていたと分析した。ところが現在では、祖先祭祀観念の希薄化と火葬化によって、逆に子孫が死者の尊厳を脅かす存在となり、あらたな法的規制が必要であることを、ヨーロッパの法的観念である「埋葬義務」を援用して指摘した。

(3) 近親者のいない高齢者への葬儀支援について、横須賀市のエンディングプラン・サポート事業を取り上げた。そこでは近親者が物理的に存在しないのではなく、さまざまな事由で関係が途絶えている場合の方が多いたことが判明した。この制度により故人の遺志を貫くケースがある一方で、サポート契約の履行過程で、近親者と連絡をとることで関係が改善し契約解除となった事例もあった。これは制度の欠陥というよりも逆に契約者を取り巻く紐帯の改善であり、趣旨的には目的を全うしたともいえる事例である。この点も踏まえると、契約の過程における関係者の接点の構築が重要であることも指摘している。さらにエンディングプラン・サポート事業は一定の所得水準以下の人だけを対象としていたが、それ以上の人々もその必要性が判明し、あらたな制度、組織が開始された。また千葉市、船橋社会福祉協議会、前橋積善会厩橋病院など、公共団体、第三セクター、民間団体などの事例を通して、社会全体として近親者のいない高齢者への対応が必要であることを考察した。

(4) 1990年代以降の急速な葬儀の変化に関する資料集成として「現代死者儀礼写真」約95,000枚あまりの写真の整理、分析、公開を行った。この資料群は日本初の葬儀業界専門誌『S O G I』の現代葬儀レポートその他の葬儀写真で、2017年の廃刊により歴博が寄贈を受け、デジタル化を進めた。現在、個人化が進む葬儀においては、実際の葬儀現場での調査や撮影がより困難になっており、この資料は著名人の大型葬や社葬等の団体葬、個人葬など、多様な葬儀の記録であり、1990年代以降の変化を示す資料的価値の大きなもので、今後の葬儀研究での重要な機能を果たすものと考えられる。これらの写真の分析を通して、より故人の個性や遺族、関係者の意向を、葬儀の儀礼や祭壇のデザイン、配布物などさまざまな局面において表現されていることが明らかになった。今後のさまざまな研究のために、写真や関連資料も含め「現代死者儀礼写真」として、研究代表者の所属機関である国立歴史民俗博物館で公開の体制を整えた。利用者が必要な権利保護手続きを行うことで利用できるようになった。

(5) 高度経済成長期の検討において、大阪市営霊園調査を行った。大阪市設泉南メモリアルパークは、大阪市内の市営墓地がほぼ満杯となったため、1979年に現在の阪南市に設置された。これは家族墓を基本として開発整備されたが、近年、家族墓の廃止や購入後未使用のままの返還が発生しており、従来の家族墓が維持できないケースが増えていることがわかった。さらに瓜破霊園内に作られた合葬式共同墓への改葬なども行われており、家族墓を維持できない、もしくは必要としない人々の動向が明らかになった。

(6) 近世近代の死者祭祀のあり方について、特に位牌に焦点を当てて検討を行った。位牌についてその形態や戒名、年代などの体系的な研究はまだ十分になされていない。都市近郊の墓地として狛江市泉龍寺墓地の墓碑調査および位牌調査によって、位牌の格式が、型式、高さ、戒名を指標としており、墓標の格式の指標と共通性を持つことが判明した。位牌は、雲が登る

形の頭部を持つ雲形位牌が16世紀末から18世紀中葉に主体となり、18世紀中葉から江戸末期までは牌身が札状の札形位牌が増加しつつ、雲形位牌、頭部が唐様の屋根となっている廟所形位牌が併存する時期であった。明治以降になると札形位牌が主体となっていくなど、時代によって形態が変化しているとともに、雲形、廟所形位牌は大型で、高い格式の戒名が記されていることから、位牌の格式が形式、全長、戒名を指標として、近世墓標の格式の指標と共通性のあることがわかった。

(7)日本の墓制では、遺体埋葬の上に石塔を建てる単墓制だけでなく、埋葬地と石塔建立地が異なっている両墓制があり、民俗学史では両墓制の成立について研究が重ねられたが、火葬率が99.9%となって両墓制は廃止されつつある現在、終焉についての研究はあまりみられない。埋め墓が単に単墓制になる、放置されているとのわずかで単純な報告では、現状は把握できず両墓制が地域の墓制として詳細に検討する必要性を指摘する。ここでは、土葬の終焉とともに埋め墓を管理維持するために、近接区域に単墓制を導入している地域や、火葬普及後も遺骨を埋め墓に埋葬して従来形態を維持するなど、地域の墓地意識が反映されており、当該地域の変容の論理を把握する必要があることを提示した。

(8)本研究では、現在の社会的関心の高さから、多様な形態で成果を公開していった。2017年11月12日、大阪天王寺区の應典院を会場にして、「上方で考える葬儀と墓～近現代を中心に」と題してシンポジウムを開催した。これは、京都や大阪での葬送儀礼や墓の変容について、その歴史的展開の相違から東京という政治的中心とは異なる対応をとってきていることが調査によって判明し、その研究成果を報告した。なお開催に関しては民間の文化団体からの協力をいただいた。当日は人々の関心も高く、約150名程が集まり会場は立ち見が出るほど盛況であった。

2018年4月3日、国立歴史民俗博物館にて、国際研究集会「葬送儀礼の近代化と専門家教育」を開催した。これはアジア圏における葬儀の近代化過程と葬儀職従事者の専門家教育、資格化について議論が行われた。そこでは葬儀教育の歴史や公共墓地制度、大学生に関する死生学教育、また葬儀思想などの報告がなされ、日本側からは、1990年代以降の死を取り巻く環境や葬祭業の資格制度について報告され、現代中国の死生観と国家思想の連関が照射でき、日本の死生観と行政対応の相違が明らかになった。この国際研究集会は、中国長沙民政学院、国立歴史民俗博物館の共催、また株式会社冠婚葬祭総合研究所の協力によって開催された。

2018年12月15日、16日には、早稲田大学大隈記念講堂大講堂で、本プロジェクトの成果公開として大きな柱である歴博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして」と題して、早稲田大学人間科学学術院との共催によって開催した。その報告は「無縁化への道程」、「縁なき人々の追悼」、「縁なき方向へすすむ墓」をテーマとし、墓の無縁化や引き取り手のない遺骨の増加など現代の葬送墓制の課題を、近世以降の家制度、両墓制や寺位牌の祭祀など多様な民俗を踏まえ、現代のデジタル時代の状況も含め、死者と生者の共同性の有り様について検討を行い、今日の研究状況、今後の課題について討論を行い、一般来場者500人を超える人々が参加した。

なお本研究の成果は研究書として吉川弘文館から刊行予定であり、現在編集中である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 山田慎也	4. 巻 なし
2. 論文標題 納骨堂の成立とその集合的性格	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 63 - 86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷川章雄	4. 巻 なし
2. 論文標題 発掘された江戸・東京の墓：家と個人をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 12 - 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朽木量	4. 巻 なし
2. 論文標題 屋敷墓から見た近世・近代のイエ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 36 - 55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 問芝志保	4. 巻 なし
2. 論文標題 明治民法と祖先祭祀論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 56 - 62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横村久子	4. 巻 なし
2. 論文標題 単身化社会・無縁化社会の進行と行政：大阪市と京都市、横須賀市の事例研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 88 - 114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小谷みどり	4. 巻 なし
2. 論文標題 誰が死者を弔い、墓を守るのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 115 - 130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上興匡	4. 巻 なし
2. 論文標題 葬儀研究からみた弔いの意味づけの変化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 131 - 148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木岩弓	4. 巻 なし
2. 論文標題 死者を忘れない：“死者の記憶”保持のメカニズム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 150 - 168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森謙二	4. 巻 なし
2. 論文標題 工なき時代の墓地埋葬の再構築のために：「埋葬義務」との関連で	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 169 - 191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土居浩	4. 巻 なし
2. 論文標題 遺骨収集の現場から考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 192 - 197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜生大輔	4. 巻 なし
2. 論文標題 デジタル遺品をデジタル形見に：弔いに寄り添うデジタルメディア・テクノロジー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代日本の葬送と墓制	6. 最初と最後の頁 198 - 203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜生大輔	4. 巻 59
2. 論文標題 弔いと技術革新：1. 弔いと技術革新にかかわる研究トピック	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 情報処理	6. 最初と最後の頁 602 - 605
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木岩弓	4. 巻 8
2. 論文標題 慰霊供養	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 佼成	6. 最初と最後の頁 36 - 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎村久子	4. 巻 31
2. 論文標題 個人化・無縁化する社会の公共墓地の変化と対応	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 105 - 138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎村久子	4. 巻 32
2. 論文標題 樹木葬墓地の特性と墓制での位置づけ～「京都の樹木葬」意識調査から～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 75 - 97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 問芝志保	4. 巻 393
2. 論文標題 関東大震災と家族納骨墓 近代都市東京の墓制	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 51 - 74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木岩弓	4. 巻 68
2. 論文標題 臨床宗教師の誕生とこれから	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『全国公立病院連盟会報』	6. 最初と最後の頁 82-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田慎也	4. 巻 205
2. 論文標題 告別式の平準化と作法書	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 363-386
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土居浩	4. 巻 205
2. 論文標題 都市で死者はいかに扱われるべきか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田慎也	4. 巻 2
2. 論文標題 葬儀の標準化と個別化	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集	6. 最初と最後の頁 43-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小谷みどり	4. 巻 Autumn
2. 論文標題 猛スピードで少子高齢化が進む台湾 連合葬祭からみえた「つながり」のゆ	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ライフデザインレポート	6. 最初と最後の頁 27-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Daisuke Uriu and William Odom	4. 巻 17
2. 論文標題 Designing for Domestic Memorialization and Remembrance: A Field Study of Fenestra in Japan, ”	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 CHI '16: Proceedings of the 2016 ACM annual conference on Human Factors in Computing Systems	6. 最初と最後の頁 5945-5957
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小谷みどり	4. 巻 5月号
2. 論文標題 奄美・宇検村に学ぶ墓の共同化の試み	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ライフデザインフォーカス	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木岩弓	4. 巻 9
2. 論文標題 死者と生者の接点	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 震災学	6. 最初と最後の頁 37-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計28件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 山田慎也
2. 発表標題 葬送儀礼も含めた看取りにおける地域ケアの可能性：近親者なき人の葬儀・供養の実態を中心にして
3. 学会等名 保健医療社会学会第44回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田慎也
2. 発表標題 現代における改葬と合葬式共同墓：和歌山県古座川流域の事例から
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 土居浩
2. 発表標題 大阪七墓巡り復活プロジェクトの民俗学的考察
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森謙二
2. 発表標題 無縁墳墓改葬制度と 改葬公告 のデータからわかること
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木岩弓
2. 発表標題 永代供養墓の誕生とその展開
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田慎也
2. 発表標題 日本における葬儀業の資格化
3. 学会等名 国際研究集会葬送儀礼の近代化と専門家教育
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小谷みどり
2. 発表標題 日本における葬儀の変容
3. 学会等名 国際研究集会葬送儀礼の近代化と専門家教育
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Uriu, Daisuke, William Odom, and Hannah Gould.
2. 発表標題 Understanding Automatic Conveyor-Belt Columbaria: Emerging Sites of Interactive Memorialization in Japan
3. 学会等名 The 2018 Designing Interactive Systems Conferenc (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Uriu, Daisuke, William Odom, Mei-Kei Lai, Sai Taoka, and Masahiko Inami. “
2. 発表標題 ensecenser: An Interactive Device for Sensing Incense Smoke & Supporting Memorialization Rituals in Japan
3. 学会等名 The 2018 Acm Conference Companion Publication on Designing Interactive System (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 土居浩
2. 発表標題 墓瘞と墓参の間
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 問芝志保
2. 発表標題 東京における家族納骨墓の成立とその背景 関東大震災後の墓制
3. 学会等名 「宗教と社会」学会第26回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大場あや
2. 発表標題 新生活運動と葬儀の変容 行政の意図と地域の対応
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木岩弓
2. 発表標題 日本人の人生儀礼
3. 学会等名 中国：内蒙古大学蒙古学学院学术講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷川章雄
2. 発表標題 位牌・墓標と葬送
3. 学会等名 第109回歴史博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 朽木量
2. 発表標題 両墓制の終焉と死生観
3. 学会等名 第109回歴史博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 土居浩
2. 発表標題 死者との社会構想あるいは妄想
3. 学会等名 第109回歴史博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜生大輔
2. 発表標題 デジタル時代の弔い方
3. 学会等名 第109回歴史博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 槇村久子
2. 発表標題 無縁社会の3つの方向と共同性の行方
3. 学会等名 第109回歴史博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田慎也
2. 発表標題 近親者なき人の葬送と助葬
3. 学会等名 第109回歴史博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村上興匡
2. 発表標題 送骨と寺院
3. 学会等名 第109回歴史博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木岩弓
2. 発表標題 二・五人称の死者 の今後
3. 学会等名 第109回歴博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小谷みどり
2. 発表標題 新たな死の共同性
3. 学会等名 第109回歴博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森謙二
2. 発表標題 無縁墳墓改葬制度と墓地埋葬秩序の新構築
3. 学会等名 第109回歴博フォーラム「死者と生者の共同性 - 葬送墓制の再構築をめざして
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田慎也
2. 発表標題 納骨堂の成立とその機能
3. 学会等名 日本民俗学会年会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木岩弓
2. 発表標題 Moocからみた現代人の死生観
3. 学会等名 印度学宗教学会第57回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山田慎也
2. 発表標題 告別式の普及と宗教性
3. 学会等名 日本宗教学会第75回学術大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 瓜生大輔
2. 発表標題 自動搬送式納骨堂に宿る最先端メディアテクノロジー
3. 学会等名 日本宗教学会第75回学術大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木岩弓
2. 発表標題 イ工亡き時代の葬送墓制
3. 学会等名 日本民俗学会9月例会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 鈴木岩弓・森謙二編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 240
3. 書名 現代日本の葬送と墓制	

1. 著者名 鈴木岩弓・小林隆編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東北大学出版会	5. 総ページ数 308
3. 書名 柳田國男と東北大学	

1. 著者名 小谷 みどり	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 214
3. 書名 "ひとり死"時代のお葬式とお墓	

1. 著者名 鈴木 岩弓、磯前 順一、佐藤 弘夫	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ペリかん社	5. 総ページ数 384
3. 書名 死者 / 生者 論	

1. 著者名 山田慎也編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 国立歴史民俗博物館	5. 総ページ数 526
3. 書名 民俗儀礼の変容に関する資料論的研究(特集号)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国立歴史民俗博物館年報 外部資金による研究 <a href="https://www.rekihaku.ac.jp/research/nenpo/2017/pdf/004.pdf">https://www.rekihaku.ac.jp/research/nenpo/2017/pdf/004.pdf</a> 日本における死者儀礼のゆくえ - 生者と死者の共同性の構築をめざして <a href="https://www.facebook.com/DeathRitualsJP/?ref=aymt_homepage_panel">https://www.facebook.com/DeathRitualsJP/?ref=aymt_homepage_panel</a>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	瓜生 大輔 (URIU Daisuke) (40635562)	東京大学・先端科学技術研究センター・助教  (12601)	
研究分担者	金 セッピョル (KIM Satbyul) (00791310)	総合地球環境学研究所・研究基盤国際センター・特任助教  (64303)	
研究分担者	朽木 量 (KUTSUKI Ryo) (10383374)	千葉商科大学・政策情報学部・教授  (32504)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小谷 みどり (KOTANI Midori) (50633294)	身延山大学・仏教学部・その他  (33502)	
研究分担者	鈴木 岩弓 (SUZUKI Iwayumi) (50154521)	東北大学・文学研究科・名誉教授  (11301)	
研究分担者	谷川 章雄 (TANIGAWA Akio) (40163620)	早稲田大学・人間科学学術院・教授  (32689)	
研究分担者	土居 浩 (DOI Hiroshi) (20337687)	ものづくり大学・技能工芸学部・准教授  (32422)	
研究分担者	村上 興匡 (MURAKAMI Kokyo) (40292742)	大正大学・文学部・教授  (32635)	
研究分担者	森 謙二 (MORI Kenji) (90113282)	茨城キリスト教大学・その他部局等・研究員  (32101)	
研究協力者	大場 あや (OBA Aya)		
研究協力者	問芝 志保 (TOISHIBA Shiho)		

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	榎村 久子  (MAKIMURA Hisako)		